

泣いたっていいじゃない、オバロだもの

カツアキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

みんなが置いてったナザリツク地下大墳墓、最後まで残ったモモンガの元にオリギルメンがやって来る。何十番煎じか分からんほどありきたりな至高の42人目系のお話です。

どうも初めてカツアキです。初めての投稿&執筆ですので、言い訳がましいですがお見苦しい所を多々お見せすると思います。文章そのもの、話の構成など指摘する点が多いと思いますが何卒よろしくお願いいたします

いや、でも実際、やるぞ！と意気込んでやってみたはいいけど自分の発想力の無さに嫌気がほとほとに指しますね。他の投稿者の皆さんがかなりのハイペースで投稿して

いるのを見てて、俺もできるかな？オーバード好きやし…でも難しいですね、これってあれですか？なんでしよう？まあ文章いろいろスラスラ出て来てくれたらいいのに。こういう苦勞を何十倍にしたのをアインズ様は常にされておられるのですね、さすアイですね。

目次

笑いあり、涙あり、そんな大作ではないこ とだけは確かです！	1
泣きません骨ですから	5
プリクラ写真にご注意を!!	13
異世界転移は計画的に！	25
第一印象は見た目が8割！	40
口は災いの元	56
剣と魔法の○グレス!!	78
月並み位がちょうど良い	97

笑いあり、涙あり、そんな大作ではないことだけは確かです!

初めての投稿&執筆? 筆は使っていないので何とも言えないですね。タイトルと内容は激しく、そう、激しくかけ離れております。ご容赦下さい。

西暦2126年某日、目覚ましい技術の発展と共に著しい環境汚染により、世界はガスマスクなしでは自由に出歩くこともできず、人々は日々をただ死んだように生きていた。外で遊ぶ者など当然おらず退屈だけの世界

そんな世界に日本のあるゲームメーカーが研鑽に研鑽を重ね満を持して世に送り出した、

DMMO—RPG

YGGDRASIL、(ユグドラシル)

このゲームは当時のDMMO—RPGと比較しても

圧倒的なデータ量、異様なまでのプレイヤーの自由度を誇り、DMMO—RPGとい

えばユグドラシルと言わしめる程の大人気となった。

多くの人々がこのユグドラシルにのめり込んだ。

数多のプレイヤーが多種多様なモンスター、クエスト、ステージ、そしてPVP（Player VS Player）に明け暮れた

そのPVPに置いて、真つ先に狙われる対象となるのは

強力な種族特典や見た目の不気味さ故か、異形種プレイヤーと呼ばれるプレイヤー達であった。多くの人間種達がこぞって異形種プレイヤー達を狩っていった。

当時は異形種狩りと呼ばれていたユグドラシルの悪習とも言われる行い、運営は人間種が異形種を狩ることで特殊なポイントを得られ特殊なクラスを獲得できるといった異形種狩りを助長するかのような仕様に持っていた。

これにより運営公認の異形種狩りは日に日にその悪質さを極め、異形種プレイヤー達は衰退の一途を辿っていた。訳ではなく異形種プレイヤー達は団結し悪質な人間種プレイヤー達に立ち向かいPVPはより苛烈さを増した。

そんな中、ギルド アイvenzウルゴウン

別名、異形種狩り被害者の会

は人間種らによる理不尽な新規異形種プレイヤー狩りを止めるべく異形種狩り狩り作戦を敢行、見事に悪名を高め、高めた。

そんな彼らアインズワールゴウンの拠点ナザリック地下大墳墓は周囲を毒の沼地に囲まれた辺境の地にあり、時には1500人からなるプレイヤー達の大進行を撃退など数々の伝説という名の事実を持つ最凶最悪のDQNギルドと呼ばれる程見事に嫌われた。

だが実際彼らからしてみれば異形種狩り、もとい弱いものいじめを止めるための行為であり、いじめつ子を黙らせるには同じようにいじめるのが一番効果があるという考えからくる、いわば正当防衛的な行動である。

そんな数々の伝説を打ち立てたアインズワールゴウンがユグドラシル界に名を轟かせたのは数年前の話

現在西暦2138年某日

あの世間を、賑わせたユグドラシルも次々と押し寄せる新作ゲームにユーザーを取られ遂にサービス終了の日が来た。

いやー本編、もといプロローグ?はこんな感じですかね?ほとんど原作どうりかな?難しいですね

次回からオリ主とか皆さん大好きモモンガ様など登場させたいと思います。まあ次

がいつかは知りませんが（笑）

泣きません骨ですから

遂に夏つて感じですね！暑い！とにかく暑い！デブにはキツイです。

皆さんはこの暑さをどう凌いでいますか？

僕はおもっぱらエアコンですね、ガンガンにつけてます。

お陰で外に出ると地獄です。いやもうホントに…

皆さんも熱中症などには十分注意なさって下さい。

小まめな水分補給を忘れずに！

後、今年皆さん海に行かれますか？僕は行きたいと思つてますが何分泳ぐのが苦手
でして、まあ全く泳げない訳じゃなくて、疲れるのが嫌なんです。でもビーチの水着
ギャルは是非とも見たい！でも最近は水着の上にパーカーのようなものを羽織る人が
増えましたね、いくら日焼け対策とはいえ、…、

そんなこんなで本編です。頑張ります!!

西暦2138年某日

かつてユグドラシルに知らぬ者なしと言われた最凶最悪のDQNギルド、アインズウールゴウン。

42人のメンバーからなる少数ながらに幾千幾万のギルドの中でも十指に入る一大ギルド、彼らの悪名がユグドラシル内に轟いたのはもう数年前の話。

ログインするメンバーは日に日にその数を減らした。

もちろんユグドラシルをアインズウールゴウンを捨てた訳ではなく、皆それぞれの事情でこの地を去った。

家族のため、仕事のため、生活のため、理由は様々だ、

そんな中でもログインする者は少なからずいた。

アインズウールゴウンは多数決を是とするギルド、その多数決で賛成41反対1という本人以外の全員からの推薦によりギルド長の地位に就いたモモンガ、種族名は死の支配者オーバーロード。

そしてユグドラシルに置いて最も習得が困難、いや不可能とすらされた近く中距離における物理、魔法戦最強と言われたオーデインのクラスを取得したグラノーラ、種族名は最上位熾天使の墮天種ルキフェル。変身能力を持ち全力戦闘の時にのみ最上位熾墮天使然とした姿となる。

クラス、オーデインはイベント「ラグナロク」に出現する、Lv120のラグナロク

ドラゴンを一対一で倒すことで獲得できるクラスである。しかも武装は神器級が一つまで、さらにギルド武器、世界級アイテムの使用は不可能、つまりラグナロクドラゴン討伐は神器級一つに伝説級、聖遺物級、遺物級などで補うという無茶ぶりっぷり。さらに先着一名様のみという鬼畜っぷり。

多くのプレイヤーが我先にと挑むが誰一人としてクリアできず、かくいうグラノーラもその一人であった。

数多のプレイヤーがオーデインへの道のりを諦め別の道を歩んで行くなかグラノーラは何度もラグナロクドラゴンに挑み続け、数ヶ月という期間をかけようやくラグナロクドラゴンを討伐、獲得不可能とまで言われたオーデインの力は一時期PVP勝率8割を誇った。

そして月日は流れとうとうユグドラシルサービス終了日を迎えた。

本当に楽しかった、みんなで無茶をしたし馬鹿もした。

喧嘩もたまにあっただけど（主にたちちみーとウルベルトが）それでも胸を張って言えるのはこの思い出は本物であるということ。ゲームの中での出来事ではあったしギルメンとはアバターでしか会った事がない、それを踏まえても、楽しかったのだ。

この日は数年ぶりにへろへろがログインした。ナザリック地下大墳墓第9階層の円卓の間にて、

「イヤー、本当にしんどいですよ。マジで、残業代が基本給より高いとかあり得ないでしよー!」

スライム種エルダー・ブラック・ウーズのへろへろがドロドロと蠢きながらモモンガとグラノーラに愚痴る。

「相変わらず大変そうですね、へろへろさんは。でもまあ久しぶりに会ったんだし今日は仕事の事は忘れましょう。」

モモンガはアバター越しでも疲労MAXが伝わるへろへろを労いつつ久しぶりの再会を喜んだ

「でも本当に久々ですよねへろへろさん。忙しいのにわざわざ来てくれてありがとうございますー!」

モモンガと同じくグラノーラも久々の再会を満喫していた。

そしてしばらくはユグドラシルでの思い出話に華を咲かせる三人の異形達、サービス終了まで残り一時間程でへろへろが

「ああもうこんな時間か…」

と呟いた

「あ、その感じだと、もしかしなくても明日早いですか?」

「ええ、そうなんです明日は4時には出勤しないといけないんですよ」

グラノーラの質問にへろへろはドロドロ動きつつ答える

「4時って！今は11時だから…ほとんど寝れないじゃないですか！すみません無理をさせてしまって…」

「そんな事ないですよ僕も久しぶりに二人に会えて楽しかったですし、本当は最後まで一緒にいたいのですが。すみません」

モモンガの謝罪をへろへろは謝罪で返す。

「いや本当に無理しないで下さいね。お仕事頑張ってください」

「ありがとうございます。グラノーラさん

じゃあお二人とも、お元気で、そしてさようなら」

「ええ、へろへろさんの方こそ体に気をつけて下さいね。これはギルド長として命令ですよ」

「ははっ、ギルド長命令だそうですねよへろへろさん。僕からもお願いしますよ、これは友達としてのお願いです。」

へろへろは粘体の触手をふりつつ二人に感謝の言葉を述べつつログアウトした。
数秒の沈黙の後、

「はあ」

二人は大きいため息をついた。

「もう僕達だけですな、モモンガさん。」

「ええ、そうですね。」

そしてまた数秒の沈黙が訪れる

「でも、あれですよな！モモンガさんと会うのって結構久々ですよな！何日ぶりでしたっけ？お互いログインはしてましたけど、時間が合わないもんだから」

「ええ、そうですね！うーん何日ぶりだろう3ヶ月ぶりくらいじゃないですか？そういうえばグラノーラさん今日お時間大丈夫なんですか？いつもこの時間はいませんよね？」

「ええ、僕夜勤なんで。いつもはこの時間は働いてますけど今日は有給とったんですよ。だから今日は最後まで付き合いますよ！」

「わざわざありがとうございます！良かったー、最後は私一人かと思ってヒヤヒヤしてましたよ！」

「ははっ、すみません言うの忘れてましたよ。」

「いえいえ、じゃあどうしましょう。今から」

残り時間は40分を切っている。最後に一冒険行ける程の時間でもなく、思い出話はさつきへ口へ口と散々した、もちろんまだまだ思い出は沢山あるが、ありすぎて話きれそうにない。

「あつそうだモモンガさん！この円卓の間から出て玉座の間に行きましょ玉座の間！N

PC達も集めて最後にパーアとやりましょう！」

「おっ！いいですね。じゃあどうしましょうアレ」

「ああスタッフオブアインズウルゴウンですか。我らがギルドを象徴する武器ですし所有権はモモンガさんが持つてるんだし、良いんじゃないですか？」

スタッフオブアインズウルゴウン：神器級を超越し世界級に匹敵する程の強大な力を秘めたアインズウルゴウンのギルド武器。

黄金に輝く七匹の蛇がそれぞれ一つづつ色の違う宝石をくわえ絡みあっている禍々しくも神々しいスタッフである。

「そうですか。んんつですが、ここはアインズウルゴウンのルールに則り多数決で決めたいと思います。私モモンガがスタッフオブアインズウルゴウンを円卓の間より持ち出す事に賛成の者！」

当然反対意見などあるはずもない

「えーでは賛成2反対0ということので私モモンガがこの我らがギルド武器スタッフオブアインズウルゴウンを玉座の間に持ち出します！」

「よし！じゃあ茶番はこのくらいにしてとっとと行きましょうモモンガさん！」

「えー茶番って…」

そうして二人は玉座の間へと向かうのであった。

こんな感じで今回は終わりたいと思います。

内容ペラペラな上に安易な設定、駄文中の駄文ですね

まるで中学生の妄想を聞いているような感じ。

コメント、アドバイス、誤字脱字報告よろしくお願いいたします。

プリクラ写真にご注意を!!

広い廊下、友人と二人で歩くにはあまりにも広い廊下。ナザリツク地下大墳墓第9階層の円卓の間から玉座の間に向かうモモンガとグラノーラ。

そんな二人に会話はなく、ただただ足音だけが木霊する。そんな沈黙に堪えきれなくなり、

「あつ、あの!…ああどうぞ…」

まるで初な男女のように恐ろしい骸骨と銀髪の長身男性が話を譲り合う、それはそれは絵にならない。

数回に渡る譲り合いの末、モモンガが絞り出すように話し出す。

「正直言うんですけどね。今日が来て良かったなって思ってるんです、終わってしまうのは寂しいです。勿論そうなんですけどね、でも最後の日だからとへ口へ口さんがあそこまで無理して来てくれて、グラノーラさんが有給までとって来てくれた。勿論他のメン

バーにも来て欲しかった。でもそれはどうしようもない我が儘で…
クソツ！すみませんなんか変なこと言いましたね。忘れて下さい。」

どんなに願ってもどんなに思い焦がれても届かない願い。それは口にする事によつて、さらにモモンガの心を焦がす。

もつと良い方法は無かったか？何をどうすれば皆はここを離れなかったのか？最後の日だからと有給までとつてここに来てくれた友人に対してらしくない発言にモモンガは頭を下げる。

「モモンガさん……」

こんな時に友人にかける言葉一つ持ち合わせない自分にグラノーラは苛立ちを覚える。

後から悔いるから後悔、だからいくら悔やもうとどうしようもない。そんな事は二人とも分かっている。

分かってしまった。だからこそ止められない。

分かっているがそうせざるを得ない状況、人はそれを打破することは容易にはできな

い。

重々しい沈黙が続く中、二人は半球場の大きなドーム状の大広間に到達する。

天井には美しい四つのクリスタルが輝き、壁には数十の小さな穴が掘られそのほとんどに彫像が飾られていた。この部屋はレメゲドン、

ナザリック地下大墳墓の心臓部である玉座の間の手前にある最終防衛ライン。

モモンガとグラノーラはレメゲドンを横切り、奥にある大きな両開きの扉の前に立つ、右扉には女神が左扉には悪魔の彫刻が施されており今にも襲いかかつてきそうな迫力であった。

重厚感ある扉がまるで自動扉のように、だがゆつくりと開き二人を迎え入れた。

その先の部屋こそがナザリック地下大墳墓ギルドアインズウールゴウンの凝り性揃いのメンバーの粋を極めた最高傑作にして心臓部。

玉座の間である。

「おお…」

あまりの荘厳さに気まずさは吹き飛び、二人の口から感嘆の声が上がる。

広くそして高い部屋、500人は入れそうな部屋、見上げれば高い高い天井。天井に

は美しいシャンデリアが燦然と輝いている。

壁には42枚の大きな旗が天井から床まで垂れ下がっている、その一枚たりとも同じ紋様はなく、全てギルドメンバー達のサイン、それぞれがここにいた事の証明である。

そして部屋の中央には数十段の低い階段、その上に高い天井に届きそうな高さの玉座がそびえ立つ。

「ん？」

モモンガは違和感を覚える。その視線の先にあるのは玉座ではなく、その横に立つ絶世の美女。純白のドレスに腰まで届く艶やかな黒髪。角と翼を除けばまさに完璧な美女といえるだろう。この美女の名はアルベド、ナザリック地下大墳墓における全NPCのまとめ役、ナザリック地下大墳墓階層守護者統括の地位にいる存在。

しかしモモンガが違和感を覚えたのは彼女ではなくその手にある一本のスタッフ、勿論ただのスタッフではない、そのスタッフの名は真なる無（ギンヌンガガブ）ユグドラシルにおいて200個しかない世界級アイテムの一つナザリックの秘宝の一つである。

そんな物が何故ここにあって、NPCの手にあるのか：

持たせたのは十中八九アルベドの製作者タブラ・スマラグディナであろう事は想像に

固くない。

「勝手にNPCに世界級アイテムを持たせるなんて……」

グラノーラは僅かに不愉快を感じるが

「ま、まあ最後ですし！いいじゃないですか！

ええっと、アルベドってどんな設定だったっけ？」

モモンガはお茶を濁すべくおもむろにコンソールを操作しアルベドの設定を閲覧する。

「おわっ！」

モモンガがドン引くほどの文字の嵐。そして長い文章を飛ばし、最後の一行にモモンガとグラノーラの目が止まる。

(ちなみにビッチである。)

「え？」

グラノーラが疑問を口にする

「ああタブラさんって設定魔の上にギャップ萌えでしたね確か。」

ギルドでもトップレベルの凝り性タブラ・スマラグディナを意外な所で感じ思わず
ほっこりする二人、

「でもこれはちよつと…ねえ」

「確かに、でもどうします？俺は弄れませんよ。ギルド長でもないし、ましてや製作者でもないし。」

「うーん、ギルド長特権ってやつですかね。まあ最後だし変えましょう!!」

その後約2分間に渡りアルベドの設定文最後の一行を巡って二人は意見を出し合う。

モモンガを愛している、ちなみに四十肩である、ギルメンに執着してる、ちなみに蕎麦派である、グラノーラを愛してる、ちなみにオタクである e t c .

結局じゃんけんで勝利したモモンガにより（グラノーラを愛してる。）と書き換えた。

「うわっ何コレ恥ずかしっ!!」

軽く悶絶するグラノーラと下手をすれば自分が悶絶するはめになるところだった事に安堵するモモンガ。

もはや先ほどまでの気まずさなど微塵も残っていない。残り時間は後20分。

「さてと、マスターソースを開いて…」

モモンガは玉座の間にてナザリックにいる主だったNPCに玉座の間に来るようマ

スタートソースを操作する。

15分後、階層守護者7人、階層守護者の配下の者達21体にプレアデス&執事のセバスの7人にメイド達42人

合計77人のNPC達が集まる。ナザリックにはまだまだ多くのNPCらがいるが彼ら全て移動させるのはさすがに時間がかかりすぎるので妥協した。

残り5分

「とりあえずこんな所ですね。やっぱりメイドもプレアデスも美人揃いですね!!何かテンション上がってきましたよ!」

「変なことして最後の最後で運営にBANされたなんて笑えないんで止めて下さいね?」

最後ということもあり、テンションが変な方向に向かいそうなグラノーラをモモンガがたしなめる。

「分かってますよ、それくらい。ペロロンチーノさんと同じくらい運営から警告を受けてきたんですよ?ギリギリを攻める事にかけてはユグドラシルでも五本の指に入ると自覚してますとも!」

(ペロロンチーノ、ギルド・アインズワールゴウンの中でも一、二を争うエロリスト。エロゲー・i s マイライフと豪語する猛者。モモンガとも親しく、よく実姉のぶくぶく茶釜に愚弟と罵られていた。)

「いやそれ何の自慢なんですか!」

「誇らしげに自らのストイックな変態性をひけらかすグラノーラにモモンガは突っ込んだ。」

残り2分

「残り2分切りましたね、モモンガさん。」

「ええ、終わってしまうんですね。ユグドラシル、アインズワールゴウン私のいや俺達の

全て」

たかがゲームと言うのは簡単だ、他人が見れば皆「ゲームぐらいで…」と言うことだろう。

「はい。そうです、そうですとも!!ここはナザリック地下大墳墓アインズワールゴウン!!紛れようもない僕達の全て!何年も友人達と遊んで、揉めて、冒険した…」

それも後1分少々で消えてなくなる。

「モモンガさん今まで本当にありがとうございました!!」

「こちらこそ…ありがとうございます。グラノーラさん…」

唐突な友人からの感謝の言葉にモモンガは言葉を詰まらせながら感謝の言葉を繋ぐ。

「最後です!ギルド長、さあ玉座へ!!」

「…そうですね!いや、そうだな…」

最後ということもありモモンガは渾身の魔王ロールを始める。

ゆっくりと厚顔に不遜に堂々とした足取りで玉座へ向かい、そして着用しているロブをはためかせ玉座へと腰かける。

カツンツ！とスタツフオブアインズウールゴウンで床を突き甲高い音を奏でる。

そしてその玉座の横に魔王の臣下のようにグラノーラは全力戦闘形態へとその姿を変え、膝まずつく

その様はなんとも美しく絵になった。

「聞け！我が友、我がシモベ達よ！今日この時までこのナザリック地下大墳墓アインズウールゴウンを守護してきたこと大義であった。私は非常に満足だ!!」

その言葉を言い終わるとグラノーラは立ち上がり

声を張り上げた

「魔王モモンガ万歳ッ！アインズウールゴウン万歳ッ！万歳ッ！バンザアアアイ!!」

そして世界は終わる……
ユグドラシルが消えてなくなる。
はずだった。

異世界転移は計画的に!

ユグドラシルは終わるはずだった。

ここ、ナザリック地下大墳墓アインズウールゴウンもまた然り。

だが、どういう訳か彼らはここにいる。

「……………」

二人の間に先ほどとは違う気まぎれさが充満する。

渾身の魔王ロールを決めたはずのモモンガと全力の万歳絶叫をしたグラノーラ。

そして数十秒が経ちモモンガが口を開く

「うーん、ログアウトしませんね、」

「そうなんですよねー、あーあくソツ運営め! 仕事しやがれ!!」

「まあサーバーダウンが延期になったんでしようね、ほんの少しの間だけどまだここにいられるんですし、いいんじゃないか？」

「そう考えるしかありませんね。よっこいしょ。」

折角サービス終了時間に合わせて行動していたのにこの有り様、最後の最後にケチをつけた気がしてグラノーラは軽い憤りを覚えるがモモンガの一言でまあそれもそうか……と納得した。

胡座をかいて玉座の横に座るグラノーラ、翼が邪魔なので人間形態へと戻る。

「でもどうしますか？今から」

グラノーラはモモンガにフワツとした質問を投げかける。

「どうするってねえ、まあいつサヨナラかも分からないんでどうしようもないですね。」

思い出話に華を咲かせても良いが、途中でサーバーダウンなんてされては気分が悪

い。

しかし数分が経過してもログアウトされない事に違和感を覚え始める二人、

「ねえこれ幾らなんでも遅すぎませんか？」

「グラノーラさんもそう思いますか？」

「もしかしてコレって……ユグドラシル2が始まったって事ですかね？」

「そうだと嬉しいんですけど。何の連絡もないし、あれ？グラノーラさんちよつともう一回喋ってみて下さい。」

「ん？どうしたんですか？」

「いやグラノーラさん口が動いてますよ？」

「えっ!？」

ユグドラシルにおいてプレイヤーの使うキャラクター、アバターに表情はなく全て会話とアイコンで表す仕様となっている。口が動いて言葉を話すのはユグドラシルではあり得ない現象だった。もつとも、この現象がユグドラシル2からなるものか否か確かめるべくモモンガが動く。

「とにかく、この事態が運営の粹な計らいか、それとも何かしらのバグなのか。確かめてみましょうか、

えーと、GMコールなんて使うのいつぶりだろ。

まあいいや……」

【GMコール……システム不良による移動阻害、ログアウト不可に陥ったプレイヤーが運営に助けを乞うことができる救済措置。勿論異形種狩りによる苦情は一切受け付けない。】

モモンガは数年ぶりにGMコールを使おうとして異変に気付いた。繋がらないのだ、プレイヤーの救済措置であるはずのGMコールが！

「どうなってるんだ! GMコールが繋がらないなんて!」

モモンガはGMコールが繋がらない事に混乱するが、何故かすぐに落ち着きを取り戻す。

「マジですかモモンガさん!? ヤバいですね。どうしよう……」

「いかがなさいましたか? モモンガ様、グラノーラ様。」

パニックる二人の会話に透き通るような女性の声が入る。

「GMコールが繋がらないみたいなんですよ」

「……えっ?」

パニクリすぎて普通に会話をしてしまうグラノーラと幾分かの冷静さを取り戻したモモンガとのリアクションに誤差が生じる。

「申し訳ございません、無知な私は（ジーエムコール）なるものを存じ上げません、もしこの愚かな私に今回の失態を払拭する機会を与えていただけるのであれば、これに勝る喜びはございません。」

「えー」

モモンガはこの異常な事態に気付き小さく本当に小さく絞り出すように驚愕の声を漏らし言葉を失う。その際全身が緑色の不思議な光に包まれ精神が何故か安定する。

「いやそんな畏まる必要はないよ、GMコールなんて滅多に使わないから知らない人も珍しいって事は、、、ん？、、、えっ？」

ようやくグラノーラもこの事態の異常さに気付く。

NPCであるはずのアルベドがこちらを美しく潤んだ涙目で謝罪とそれを払拭する

機会を懇願してきたのだ。

感覚で言うと数年間飾り続けた人形がある日突然喋りだす。そんなトイ・スト○リ○的なチャヤ? キー的な展開が起きたときと同等の衝撃である。

「ちよちよちよちよ、えっ? ウツソ何で、イヤイヤ待つて待つて、ア、アルベド……?」

混乱のあまり言葉を詰まらせるグラノーラ、それを見かねて既にかなり冷静さを取り戻しつつあるモモンガがフォローを入れる

「あー、ゴホン」

アルベド、悪いが私とグラノーラさんは少々疲れているようだ。少しばかり席を外してもらえないか? 他の者の達もだ、それぞれの持ち場に戻るといい。そして各々の持ち場にて何か異変が起きていないか調査せよ。そうだな…一時間後に否二時間後に第六階層の円形闘技場に第四、第八階層守護者を除く全ての階層守護者は集合せよ、その時に何か異変が起きていたかを聞こう。

では皆のもの行動を開始せよ!」

「はっ！かしこまりました!!」

モモンガの言葉に全ての階層守護者並びにその配下達は同時に声を上げ、行動を開始する。

最後にアルベドが深々と頭を下げ玉座の間を後にする。

守護者達が退出して10秒ほどが経ったが、尚、玉座の間には人影があった。セバス率いるプレアデスである

「うーん、セバスよ悪いが一度外に出てナザリックの周囲を一キロ程でかまわないから調査してきてくれ。

もし知的生命体がいたらなるべく戦闘は避け友好的に接するよう心がけナザリックまで連れてこい、そうだな：ソリュシャンとユリを供に連れて行け、調査が終了次第ナザリックへと帰還せよ。二時間後の円形闘技場での場にお前も出席せよ良いな？他の者は持ち場に戻り他の守護者同様に異変がないか調査せよ。

では行動を開始せよ！」

「はっ!ではこのセバス・チャン並びにプレアデスがユリ・アルファ、ソリュシャン・イ
プシロン御身のご命令に従い行動を開始します。」

「では失礼いたします」

「失礼します」

セバスの言葉にユリそしてソリュシャンが続けて了解の意を示し退出する。
残りのプレアデス達も一言失礼いたしますと言い優雅に退出する。

全NPCが退出し二人つきりになった所で二人はその場に座り込む、モモンガは玉座
にだらしなく全身を預けるように、グラノーラは普通に脚を伸ばして後ろ手をつき天を
仰ぐように座る。

「あー、びっくりしましたね。でも凄いですねモモンガさん、本当に魔王みたいでした
よ。名前に難ありですけど、さすがギルマス。僕なんて混乱しすぎてがつつりフリーズ
しましたし、

っていうかモモンガさん対応早すぎないですか？皆にテキパキ指示出しましたけど。そもそも何でNPC達が動いてるんですか？言葉まで喋ってましたし」

「まあ昔みんなでふざけてた時にやってた魔王ロールの賜物とでもいいましようかね？あと、情報収集は基本ですしNPC達が私達の指示を理解し尚且つそれを実行するかも見ておく必要があったんですよ。正直賭けでしたけどね。でも上手くいったように安心しましたよ。襲い掛かれたらどうしようかと思いましたよ。」

NPC達が何故あなつたのかは分かりません。見たところ玉座の間にいた彼らの忠誠心は今のところ本物のようです。あの忠誠心が一時的なものか恒久的なものかは今分からないので注意が必要ですね」

自分が混乱している間に冷静に周囲観察していたモモンガにグラノーラは改めてギルマスさすが！と心の中にて叫ぶ。

「でも後二時間弱で守護者達からの報告を聞くんですよね？モモンガさんは良いとして俺はどうなんでしょう？モモンガさんみたいに魔王ロールした方がいいんですかね？」

「一応何かしらのロールプレイをなさってくれた方がこちらとしても魔王ロールがやり易いんですけどね。まあ無理なさらないで下さい。」

「うーん、じゃあロールプレイねえ…どんなだろ?」

「グラノーラさんは墮天使ですからね、何かこうだらつとした方がいいんじゃないですか? リラックスした感じというか」

フワツとしたアドバイスに困惑しつつも墮天使っぽい感じのロールプレイを目指した結果、お気楽セクハラ野郎に収まった。練習をするのも面倒だと早速見事な墮落っぷりを披露するグラノーラにモモンガは謎の頼もしさを感じる。モモンガはあることを失念していた。彼が、グラノーラがペロロンチーノと同等のエロリストであるということとを! そんな彼がお気楽セクハラ野郎を目指せば最早それはロールプレイの域を超え本質の領域に到達する。

「後一時間ですか…結構長いですね」

「そうですね……!ん?セバスか、…ああ……
なんだと?!」

「どうしました?モモンガさん」

「今セバスから【伝言】がありまして、どうやらナザリツクの周囲が毒の沼地からただの草原になっていたようです。」

「……何が起きてるんだよ……」

セバスからの【伝言】によって伝えられた情報は二人に大きな衝撃を与えた。

「……よし、ご苦労セバス。お前達はナザリツクに帰還し外の様子を報告せよ。後一時
間後に第六階層の円形闘技場だ。」

セバスは【伝言】越しに了解の意を伝え【伝言】が切れる。

場所は変わりナザリック地下大墳墓地表部にて「伝言」にて報告を終えたセバス、ユリ、ソリュシヤンの三人は主の命に従うべく帰還を開始する。

「では、戻りましょうか、ユリ、ソリュシヤン。」

「行きましょう。」

「かしこまりましたセバス様、それでモモンガ様は何と?」

ユリは頭を下げて了解の意を示し、ソリュシヤンは了解の言葉の後に主の反応を伺う。主の声を命令をセバス一人だけで独占するのはよろしくないとか考えてはいない。多分

「少々驚かれていたように思えますが恐らく私の気のせいでしょう。それより一刻も早く戻って至高の御方々にお伝えせねば!」

セバスの一言を皮切りに三人はなるべく早くそして優雅にナザリックへと帰還を開始する。

そして場所は玉座の間から円卓の間へと移動した支配者達に。

二人はそれぞれの役を決めてから今後のナザリックの方針を決める。

ここはユグドラシルかそれとも別の何かなのかをハッキリさせるために。

「やっぱりシステムのバグや新しいユグドラシルつて訳じゃ無さそうですね、どう考えてもおかしい所が多すぎる。大体俺の口が動いてることも、そして頬つぺた叩くと痛いのも、若干の食欲を感じるのもどう考えてもゲームの領域を超えてる。」

「グラノーラさんもそう思いますか？」

実は私もさつき守護者達の前で取り乱した時に急に精神が強制的に沈静化されるのを感じました。食欲は全く湧きません。骨の体だからでしょうか？」

「それじゃあ、今分かっているのはここはユグドラシル2ではない何かであるって事だけですね。」

他に何か気付いた事はありますか？モモンガさん」

「いやこれといって特にありませんね。」

それと今後の方針はやっぱりしばらくは情報収集に従事した方が良さそうですね、ここが何であるのか何処なのか、知りたい事は山ほどありますし」

「そうですよね。はあー後30分かあ、

緊張してきた……あつそうだ! 気晴らしにちよつと早めに行つて自分たちがユグドラシルプレイヤーとしての力を十全に使えるかチェックしません? スキルとか魔法とか!」

「おっ! いいですね。行きましよう行きましよう!!」

グラノーラの能力チェックという名の気晴らしにモモンガは賛同し残り30分しかないからとイソイソと第六階層へと向かうのであった。

第一印象は見た目が8割！

ナザリツク地下大墳墓第六階層ジャングル

地下であるにも関わらずまるで昼間のように明るい。

電灯などではなく様々な場所に「永続光（コンティニユアル・ライト）」の魔法がかかっており、さらに本来天井であるはずの場所は燦然と夜空の星が輝いている。勿論本物の夜空ではない。かなりのデータを使用し本物（リアルでも見る事は叶わないので、過去の画像等を参考にした。）の空のように時間と共に変化し朝日も昇るし、夕日も沈む。

そんな第六階層の中心部には何層にもなる客席が中央を囲むような建物、円形闘技場（コロッセウム）がある。

その客席には所狭しとゴーレムが観客として鎮座している。

この建物の別名は円形劇場（アンフィテートルム）

俳優は侵入してきたプレイヤーであり、観客はゴーレム達、そして貴賓席に座るのはアインズウールゴウンのメンバーである。演劇の内容は殺戮。過去、ナザリツク地下大墳墓史上最大の危機である、1500人のプレイヤーによる大侵攻。その大侵攻以外では、どんなに強いプレイヤーであろうとも、ここで脱落する。

モモンガとグラノーラはリング・オブ・アイズウールゴウンを使用し、円卓の間から第六階層の入口に転移して来ていた。

「とりあえず成功ですね。」

モモンガは無事に指輪が力を発揮し転移が成功したことに安堵の言葉を漏らす。

第六階層の入口は門ではなく、巨大な格子戸にて仕切られている。

格子戸に近づくとりアルでも感じた事のない、植物特有の青臭い匂いを感じ、やはりゲームでは無いことを二人は実感しつつ、恐らく現実である可能性が濃厚であると考え
る。

そして二人は自らの役を演じきる覚悟を決め、前に進む。

失敗は許されない。失敗すれば守護者全員を敵に回す可能性が僅かにあるからだ、玉座の間にて守護者達の忠義は本物と今の所、断定している。

しかし、その忠義は永続的なものかは断言できないからだ。

格子戸は二人の接近に合わせ、勢い良く上に持ち上がった。

格子戸が上がり、二人は己の認識の甘さを後悔する。

まだ20分以上時間はある。にもかかわらず、階層守護者にセバス、ユリ、ソリュシヤンまでもが、何時からそうしていたのか片膝をつき、頭を下げ待っていた。

5分前くらいに来るだろう。そんな考えは甘かった、甘すぎたのだ。

「……待たせたな、お前達。……何時からそこにいたのだ？」

モモンガは咄嗟に素朴な疑問を口にする

「約30分程前かと……」

臣下の礼を取りつつも、恭しく答えたセバスの言葉に二人は戦慄する。

二人は約20分前に到着した、その30分前と言うことはすなわち、50分前からここにいて、臣下の礼をとっていたのだというのだ。

5分前行動は基本だが、50分前行動なんて聞いたことがない。

「そ、それは本当に待たせてしまったようだな。

謝罪をせねばなるまい。

「すまない。」

「(やつべえええ!!

5分前に守護者が来ると思ってた20分前に来たのに!これじゃ自分たちの力を試すなんて無理じゃん!!マジの

ぶっつけ本番なの!?)

あー、結構待たせちゃったか。

ごめんね。」

モモンガは支配者らしく鷹揚に、

そしてグラノーラは心の中で絶叫しつつも、できるだけ軽い口調で謝罪の言葉を口にする。

絶対的支配者である至高の42人の頂点に君臨するモモンガ、そして同じく至高の42人の一人であるグラノーラ、両者からの突然の謝罪に困惑する守護者達。

「お、お顔をお上げ下さい!!!我々ごときのために頭を下げるなどお止め下さい!!!」

焦ったアルベドが守護者達を代表し主人達に頭を上げるように懇願する。

「アルベドの言う通りでございます！」

どうかお顔を上げて下さいませ。我々は一時間や二時間程度、御身をお待ちすることなど何の苦でもございません!!

それどころか至高の御身のご到着を待つことしかできない矮小な我らの方に責があるかと具申いたします！」

丸眼鏡に赤いスーツにオールバックの黒髪に鋼の尻尾を持つ最上位悪魔である第七階層守護者デミウルゴスが

アルベドに続き二人に顔を上げるように懇願し、あまつさえ責を負うべきは我らであると言いつ出したのだ。

さらに周りの守護者達も同意であると頭を縦に振り続けていた。

「《どうしましよ、グラノーラさん何か良いアイデアないですか？

守護者達の忠誠心が怖いんですけど!》

では今回の遅刻は不問とするという事で良いか？」

「俺も怖いですよ！特にアルベドが涙目なんて！

ヤバイです。惚れそうです！自分が怖い！」

遅れといてなんだけど、そうしますか。

このままじゃ埒が開かないし」

「はっ！仰せのとおりに！！」

【伝言】越しに会話をしつつロールプレイを続ける二人の言葉に守護者達は安堵の表情で了解を示す。

「では、皆の者。各階層の調査の結果を聞かせてくれ、

まずは第一〜第三階層守護者である、シャルティアからだ」

「かしこまりました、妾は御身の御命令に従い、第一〜第三階層の巡回をいたしました。特に異変はございませんでしたえ。」

そう答えたのは、第一、第二、第三階層守護者、シャルティア・ブラッド・フォーレン

種族は、吸血鬼の真祖トウル・ヴァンパイア

全階層守護者中最強の力を持つ存在、創造主は

ナザリツクが誇るエロリスト、ペロロンチーノ。

故に大量の変態設定が設けられており、今も潤んだ瞳でモモンガを見つめつつ報告している。

「なるほど、了解した。とりあえず第三階層までは異変なしとしよう。ご苦労だったなシャルティア。」

「とんでもございせん。モモンガ様達、至高の御方々からの御命令をこなす事は我らにとって、何物にも勝る褒美であり、誇りでありんす。」

「……ふむ、まあうん、そうか……」

では次、第五階層守護者コキュートス。

報告を」

「ハッ、私ノ守護スル第五階層デモ特ニ異変ハ、アリマセンデシタ。」

全身をライトブルーの外皮鎧を身に纏う、凍河の支配者コキユートスは白い息を吐きつつ報告をし、頭を下げる。コキユートスの創造主は武人・建御雷である。

性格もコンセプトデザインも武人という設定の

蟲の王ヴァーミン・ロード

ナザリツク一の武器使いである。

階層守護者中、単純な強さならシャルティアが勝るが、武器を使用した一撃の火力ならばコキユートスの右に出るものはいない。

「そうか。コキユートス、ご苦労であったな」

「勿体ナキオ言葉!」

「では次、第六階層守護者、アウラそしてマール、報告を。」

「はい！ 私達の守護する第六階層のジャングルには特に異変はありません」

「そ、そうです。 餓食狐蟲王さんにも確認しましたので、間違いないかと……」

第六階層守護者はオッドアイを持つダークエルフの双子である、

姉のアウラ・ベラ・フィオーラ

妹のマール・ベラ・フィオーレ

である。

姉のアウラは明るく明瞭快活な性格だが、

妹のマールは自信なさげにいつもオッドオドしているが、実は強さの序列で言えば、シャルティアの次に強いのが、このマールである。

アウラはビーストテイマーであり、個人での戦いではなく多くの魔獣を従えての集団戦を得意とするので本人のステータスはさほど高くはない。

マールは、自然を操るドルイドとしての能力が高く、広範囲における蹂躞戦を得意とする。

見た目はアウラは少年、マーレは少女の格好をしているが、実際の性別は逆である。アウラは男装少女、マーレは男の娘、といった具合である。

ちなみに餓食狐蟲王とはナザリック五大最悪の異名を持つ存在、第六階層の「大穴」と呼ばれる場所の領域守護者であるが、五大最悪はモモンガ、グラノーラ共にあまり知らない。というか知りたくない

「よろしい、ではデミウルゴス、報告を」

「かしこまりました、モモンガ様。

私の守護する第七階層溶岩では特に異変はございませんでした。」

「なるほどな、第一く第三、並びに第五く第七までは異変なしか。

了解した。

では、セバス報告を、お前が外で見てきたことを報告せよ。」

「かしこまりました。」

セバスは表情を崩さず、淡々と報告をしていく。

外は毒の沼地ではなく、ただの草原で、小動物は数匹確認できたが、どれも知性は皆無な上、脅威にはなり得ない程脆弱であると。

ただ、周囲一キロの範囲でしか調査を行っておらず、

この現象の原因までは突き止めるに至らなかった。

セバスは報告を終え、主の返答を待つ。

「そうか、よろしい。

セバス、未知なる外界の調査ご苦労。

ユリとソリュシャンらの三人には後程、何か褒美を進呈しよう。」

「なっ!?

それは恐れながらモモンガ様。

我らは既に御身からの御下命と言う最上の褒美を頂戴しております。その上で何かを頂くのはあまりにも恐れ多いです。」

「ユリとソリュシャンはどう思う?。」

「セバス様と同じく」

「私めも同じにございます」

モモンガの問いにユリ、ソリュシヤンの順に自らもセバスと同意見であると答える

「俺達があげたい、と言つてもか?」

久しぶりにグラノーラが口を開くと、何やらパウハラ的な事を言い出した。

ここは強引にでも褒美を授与するべきだと判断したためだ。

「……ですが」

「セバス! 至高の御方が貴方達に褒美を渡したいと仰っているわ! それを拒否しようと
言うの?」

アルベドが尚も粘ろうとするセバスを責める。

「まあ、落ち着けアルベド。」

セバス、褒美と言つてもな、そんな大した物はやれん。

だから気軽に受けとるといい。

それで、正直お前達が何を欲するか、よく分からん

だから、何か欲しい物があれば言え、何かはあるはずだ。期限は3日以内とする。これは俺とモモンガさんからの命令だ。良いな？」

モモンガがアルベドを鎮め、セバス達に命令を下す。

「かしこまりました」

やはり、どこか納得のいつてなさげなセバス、ユリ、ソリュシヤンの三人は頭を下げ、
渋々了解する

「よろしい。」

守護者達も各々の守護階層の調査ご苦労であった。

「そうだな……グラノーラさん、褒美として彼らに労いの言葉でも掛けてあげてください」

色々面倒になってきたモモンガは、グラノーラへと無茶振りをする

「エー」

「ありがとうございます、

さすがはモモンガ様、至高の御身からの労いの言葉は何よりも我々の励みになります。

グラノーラ様からの御言葉にこの場にいる全ての者が歓喜し、更なる忠誠を捧げる事でしょう!!」

小さな声で驚いていると、アルベドがモモンガに感謝しつつも、労わざるを得ない状況に持っていく。

これは自分のためではなく、先ほどセバスに褒美を渡したいと、言ったことが原因で

ある。

他の守護者が辞退する間を与えぬために。

「あー、じゃあまず、

おっほん!!」

覚悟を決め、咳払いを一つ

。ここは軽い口調ではなく、モモンガのように支配者ロールを決めるべきだと判断する。

「顔を上げろ」

グラノーラの身体から金色のオーラが立ち上る。

その瞬間、守護者達の身体は信じられない程の重力を帯びる。

オーデインのスキル、【神の重圧】

視認可能な範囲にいる対象にのみ効果を発揮するスキル、効果は超重力によるダメージ及び行動阻害。低位の魔法発動阻害である。

勿論、そこまで強力ではなく、レベル80以下の特殊な対策をとっていない存在であれば三秒で絶命へと追いやれる程度。レベル100プレイヤーが多くいたユグドラシルでは殆ど使いどころの無い、死にスキルである。

守護者達も当然、ダメージまではいかないが、圧倒的な力の波動を感じ、自らが崇拝する存在の偉大さに、恐怖し、それ以上に歓喜する。

「(モモンガさんめ、後で覚えてろよ。

その前に何て労えばいいんだ!!)」

この重圧の発生源がこんな事を考えているとは誰も気づかずに。

口は災いの元

モモンガの無茶振りにより、守護者達に劳いの言葉を掛ける事になったグラノーラ。しかし、リアルでも夜勤勤めの平凡男性にはあまりにもキツイものがあつた。それでも彼らの望む支配者を演じきるべく、無い知恵を振り絞る。

「では、シャルティアから、

シャルティア、面をあげよ」

人生で初めて面をあげよと言つたグラノーラの言葉にシャルティアは忠実に従う。

グラノーラのスキルにより身体が重く感じるとはいえ、

守護者達にとって、動けない事は無いのだ。

そしてグラノーラ自身もそろそろスキルは必要ないとして、解除する。

「シャルティア、お前はこのナザリック地下大墳墓の第一、第二、第三階層という全階層守護者の中で最も広い範囲を守る者だ。そして第一階層はナザリックの玄関口。お前

はそこを守る者であり、階層守護者の一番槍という大任を担う者だ、その事を誇りに思
い決して、

傲くおごぐる事なくこれからも忠義に励め。」

「ああん、グラノーラ様！妾にその様な御言葉を掛けて頂き感激の極みにあります。こ
のシャルティア・ブラッド・フォールン、御身の御言葉しかと心に焼き付けました。あ
りがとうございんす」

頬を赤く染め、涙を流しながら感激に身を震わせる。

「おいおい、泣くな泣くな。折角の美人が台無しにはならないが、出来ればお前には笑顔
でいて欲しい。」

そういうと、グラノーラは何も無い空間に手を伸ばすとアイテムボックスを開きハン
カチを一枚出し、シャルティアの方へと近づくと、膝をつき、シャルティアの涙を拭う。

何気無くアイテムボックスが起動させた事に内心驚くが、それは全く表に出さず
に。

「よし！綺麗になった、

では、次はコキユートス。

面をあげよ。」

シャルティアの涙を拭い終えたグラノーラは立ち上がりコキユートスへと声をかける

「一番槍の栄誉はシャルティアに与えたが、お前には私から直々に頼みがある。どうか引き受けて欲しい」

「才言葉デスガ、グラノーラ様。

頼ミデハナク、御命令ナサレバ宜シイカト。」

「否、頼みだ。

コキユートスに聞くが、俺の戦い方を知っているか？」

「強力ナ、スキルヲ使イ敵ノ攻撃ヲ無力化シテ戦ウ、

蹂躪戦ト伺ツテオリマス。」

「そうだ、そしてそれは悪く言えば、俺はスキルに頼った戦い方しか出来ないという事だ。

だが、もしこの未知の世界において俺のスキルを無効化するアイテム、スキル、その他の力が無いとは限らないのだ。そうなれば俺の力は半減どころでは済まない。

そこで、ナザリック一の武器使いと言われる、お前には俺に槍だけでなく、武器を使った戦闘のコーチをして欲しいのだ。

頼まれてくれないか？」

「ソノ様ナ大変ナ榮譽、断レルハズモ無シ！」

コノコキュートス。全身全霊デ引キ受ケサセテ頂キマス。

ソレデハ稽古ハ何時、始メマシヨウカ。

今カラデモ、私ハ何ラ問題ハゴザイマセンガ？」

「ではこの後、頼むとしよう。場所はこの闘技場を使わせて貰おう。アウラ、マーレかま

わないか？」

「勿論ですよ！」

よろしければ私達も見学させて頂けませんか？」

姉の言葉にマーレもコクコクと頷く

断れるだけの理由もなく、場所を借りる立場であるため、少々恥ずかしいが見学を許可する

「構わないとも。そういう訳だコキユートス。

わかったか？」

「カシコマリマシタ。」

よほど興奮しているのだろう。自らの大顎をカチカチ鳴らして、その間からはふしゅーふしゅーと、冷気が漏れ出ている。

喜んでくれて何よりである

「グラノーラ様、私達も是非その……御身の稽古の様子を見学させて頂けないでしょうか？」

「是非ともお願いいたします」

アルベドが見学の名乗り出て、それにデミウルゴスが続く、正直ジロジロ見られながらだと集中出来そうに無いが、アウラとマーレの申し出を良しとして、

二人の申し出を却下する理由など、あるハズもなく。

「ああ、構わない。シャルティアも見なければ見てみると良い。後で感想でも聞かせてくれ。」

お前も本来の武装では槍を使う訳だしな。

何かアドバースがあると助かる」

「かしこまりんした、グラノーラ様。」

このシャルティア・ブラッド・フォールン、御身の稽古を見学させて頂きんす。」

アルベド、デミウルゴス、シャルティアの三名に見学の許可を出し、ふと、セバスの方を見るとこちらをガン見していた。

「セ、セバス達も見学していくか？」

「よろしいのでしょうか!？」

「構わないさ、見られて困る事も無いしなー！」

実際には大いに困るのだが、少しだけ見栄を張ってしまい、何か取り返しがつかない事を言ったのでは?と、

不安な気持ちになるが、とりあえず無視する事にした。

「じゃあ次は

アウラとマーレだ。

さつきも言ったが、俺はこれからコキュートスとの稽古を行う。

きつと俺はコキュートスにボコボコにされる事だろう」

その言葉を聞き、アウラとマーレを含む全員が

コキュートスを睨む。グラノーラの言葉が冗談なのは何となく分かっているがもし、そんな事が実現したらどうなるか、彼らの瞳が物語る。

特にアルベドはコキュートスに今にも飛び掛かりそうな剣幕である。

「そんな時、俺の心を癒すのはマーレの管理する、

ジャングルであり、アウラの使役する魔獣達だ。

これはお前達にしか出来ない事だ。

何故なら、どんな魔法でも身体は治せても、心は治せないからだ。だからここの管理をしっかりと頼むぞ。

俺にとって癒しの場でもある、この場所を」

「任せて下さい!!」

マーレ! あたし達グラノーラ様の癒しの場所を管理させて頂くんだから、これからもっともっと頑張るよ!!」

「う、うん。頑張ろうねお姉ちゃん。

ぼ、僕も頑張るよ！」

アウラとマールが姉弟仲良く互いを励まし合うという、大変アツトホームな展開に心和ませつつ、

グラノーラはデミウルゴスへと激励を送る

「では、デミウルゴス。面をあげよ。

ナザリツクにおいて最高峰の頭脳を誇るお前に、どんな言葉を送れば良いか、正直少し悩んだが、お前にはあまり多くの言葉は必要無いと俺は思う。

故にお前には一言だけ送らせて貰おう。

……俺達を、退屈させるなよ？

……（あれ？何か調子に乗りすぎたか？）

「ツ!!……か、かしこまりました。このデミウルゴス、必ずや御身のご期待に添えてみせます!!」

怯える様にうつむき震えるデミウルゴスに何か罪悪感を感じつつも、当の本人は

「御身を退屈させないとは、大変な難題。これ程の難題を申し付けて頂けるとは！光栄の極み!!」

実際は凄まじく感激されていた。

「ま、まあそう気張らずにのんびりと……な?」

とりあえずフォローになっているのか分からないが
グラノーラなりにフォローする

「……かしこまりました。」

至高の存在からの言葉に従い、幾ばくかりラックスしたデミウルゴスは顔を上げ微笑む。

「(とりあえずフォローは上手くいったかな?)」

で、では次はアルベド。面をあげよ。

アルベド、お前にはこれから先、守護者統括として様々な苦勞をかける事になるだろう。

まずはそれを詫びよう」

「何をおっしゃいますかグラノーラ様！

御身が謝罪されることなど何一つありません！

それに御身から与えて頂けた使命を羨む事はあろうと

苦痛と思う愚物はこのナザリツクにはおりません！

ですからお氣遣いなどなさらぬようお願いいたします。」

「やはりそうなるか……」

アルベドよ、そう泣きそうな顔をしないでくれ。」

涙を流し懇願するアルベドにグラノーラはシャルティアにしたように、アルベドの前にしゃがみこみ、ハンカチでアルベドの目元を拭う。

「ああ……グラノーラ様あ、私の涙でそのハンカチが汚れてしまいます。」

「気にするな。俺がやりたくてやっている事だ。」

それにハンカチで女性の涙を拭うのは汚す行為ではない。ハンカチ本来の使い方だ。

この俺が言うんだ間違いないさ。きつと」

ハンカチをアイテムボックスにしまい、グラノーラは立ち上がる。

「さて、アルベド。」

守護者統括であるお前にも言っておきたい事がある。

ナザリックは今、未曾有の危機に瀕している。

その危機は俺とモモンガさんにしか認知出来ていない。それほどに小さなものだ。

だが、その小さな変化が危険だと俺達は判断している。だから、お前にはこれから守護者統括としてだけでなく、ナザリックの頭脳であるデミウルゴスの補佐、その他諸々と多岐に渡る。これからも頼りにしている。」

グラノーラの危機という言葉に守護者達に一瞬ざわめきが起こる。

それは、アルベドやデミウルゴスも例外なく。

しかし、その後のグラノーラの頼りにしているという言葉を受けアルベドは身を震わせ歓喜する。

「ああグラノーラ様。慈悲深き御言葉ありがとうございます。この守護者統括アルベド、微力ながらも御身の

御力になれるよう精進いたします。」

頬を赤く染め羽を。パサパサ動かしながら頭を下げるアルベド。

「ああ頼む。(可愛い)」

「はー!!」

アルベドの満面の笑みに一瞬惚けてしまうが、すぐに我を取り戻したグラノーラは、セバス達へと向き直り

「セバス、これはプレアデス達や一般メイド達にも言える事だが、

これからお前達には俺とモモンガさんの身の回りの世話をしてもらおう事だろう。特に俺はだらしくなく、手もかかる事だろう、よろしく頼むぞ。」

「おお、それはそれは私を含めプレアデスやメイド達にとって何よりも励みとなる御言葉。」

「このセバス・チャン、しかと心に刻みました」

セバスは深々と頭を下げ、ユリとソリュシャンもそれにならない頭を下げる。

「ふむ……（よし、これでこの場にいるNPCには大体声をかけ終えたな。ではでは、俺にこんな無茶振りをしたギルド長には軽いペナルティを負って貰わねば……）」

まあなんだ、デミウルゴスに聞きたい事があるのだが、構わないか？」

「ハッ！不肖の我が身に答えられる事であれば何なりと。」

「ならば問おう。ある所に2つの頭を持った竜がいた

右の頭は右に行こうとし、左の頭は左に行こうとする。この竜の末路はなんだと思う

？」

「どちらにも行けず、自滅……でしようか？」

「その通りだ。そしてそれはナザリックの未来でも、起こりうる事だ。

俺とモモンガさんの二人が頂点に、つまり頭の位置にいればいつか互いに違う意見を出しあい、その二頭の竜の二の舞となり、このナザリック地下大墳墓は崩壊するだろう。そのため、ナザリックの頂点にはモモンガさんを置き、俺はNo. 2に甘んじようと思う。」

「お待ち下さい！至高の存在に対して上下をつける等、到底我々配下の者達にはできません!!」

グラノーラからの突飛な提案にアルベドが反対する。
その後ろでは他の守護者達もコクコクと頷いている。

「落ち着けアルベド」

それを止めたのはグラノーラではなく、モモンガであった。

「アルベド、なにもグラノーラさんはお前達の下になるわけではない。有事の際のナザリックの方針の決定権を私が持つだけだ。

故に普段であれば私とグラノーラさんは同格とする。

それならば文句はあるまい？

それに、私はアンデッドだ。普段はお前達の世話になることは少ないだろう。しかし、グラノーラさんは墮天使の、しかも普段は人間形態だから飲食に睡眠もできる。

だから私に出来ない分、普段は存分にグラノーラさんに忠義を捧げると良い！

なんだったら子作りもできるんじゃないか？フツ…」

「……（ヤツベエエエ!!ミ、ミスったあ!!ハメられたああ!!)そしてハメさせられるううう!!

モモンガさんめ、ずっと黙ってると思ったら俺の報復を読んだな？クソツ！少しでも配下達の忠義がモモンガさんの方へと向くようにしようと思つたのに!!)

全く、アルベドは早とちりが過ぎるな。

まあ子作りはともかく、そういう事だから俺の方が手が掛かると思うからよろしく頼

むぞ。」

やれやれとグラノーラは三流アメリカンドラマのワンシーンの様に肩をすくめつつ、心の中で悪態をつく。

そんなグラノーラをモモンガは骨の顔なのに何故か勝ち誇っている事が伝わる顔で見っていた。

「ツ・えーと、あれだ！そう！やっぱりこう守護者が揃うと迫力があるね！

異形種狩りに会うだけのあの時の俺達からは想像もできませんね！ねえモモンガさん！」

モモンガのどや顔に耐えられなくなり、グラノーラは脈絡の無い話を始める。

「え、ええ。そうですね」

突然の話題変えに若干引きぎみにモモンガが答える

「あの、グラノーラ様、異形種狩りとは？」

そんな二人の会話におずおずとアウラが手を挙げ、質問を投げ掛ける。

「ん？その名の通り、異形種を狩る事だ。人間種がな。」

俺達異形種はよく人間種のプレイヤーに囲まれて、リンチされる事も結構あったからなあ。

いやあ懐かしいな！

ほんと、何回殺されたことか……

確かモモンガさんも異形種狩りの被害者だったんですね？」

「ははっ、そうなんですよ！」

いやーほんと、あの時たっちさんが来てくれなかったらどうなってたことか！」

グラノーラの言葉にモモンガが昔を懐かしむように朗らかに答える。

しかし、ギリイツ！という音が聞こえ前を向くと守護者達が殺意と怒りに満ちた眼で

こちらを凝視していた。

「どいっの……どいっのですか？」

御身にその様な無礼を働いた愚か者は……

デミウルゴス！ナザリック地下大墳墓守護者統括として命じます！即刻、その愚か者どもを見つけ出し、この世の地獄を、

いえっ！それ以上の地獄を味あわせ、殺せ！」

「言われるまでもありません、守護者統括殿。

しかし、殺すのは反対ですね。

武器を奪い、力を奪い、四肢を奪い、目を奪い、耳を奪い、言葉を奪った上で恐怖公の眷族のエサにしましょう。死にそうになればペストーニヤに中途半端に治療させればよろしいかと。死を救済と思う程の地獄を見せてやりましょう。永遠に……

では、早速行動を開始します。」

「デミウルゴス！索敵なら私の魔獣達を使ってよ！」

「そ、それなら恐怖公さんにも、手伝って貰えばいいんじゃないかな……あの、その……」
「それはありがたい！人手はいくらあっても足りませんからねえ。シャルティア、君の眷族達もご協力願いたいのですが？」

「勿論でありんす。我が眷族達もその愚か者どもへの報復に参加させていただきんす。」

守護者達が至高の存在に対して凶行を行った愚か者どもを搜索し、如何にして苦しめるかを嬉々として話しているなか、グラノーラはスキルを発動し守護者に重力を掛け、モモンガは絶望のオーラを全開にする。

「喧しい！静かにしろ!!」

グラノーラはグングニルの柄で地面を叩き守護者を一喝する。

「全くだ、騒々しいにも程がある。

お前達は我々がその愚か者どもに何もしていないと思うのか？何故そいつらが生存しているという考えに至るのだ？

そうか……我々はそんなにも、か弱い存分だとお前達に認識されていたのか。残念だ……」

グラノーラに続いてモモンガも守護者達を咎める。

モモンガは守護者を咎めるだけでなく、心外だと俯いてしまう。二人とも、もちろん演技だが。

「勘違いするな。我々に無礼を働いた愚か者どもは最早生きてはいない。報復は既に終えている」

「モモンガさんの言うとおりだ。そいつらはもういない。それに仮にそいつらが生きていたとして、お前達が報復に行ったとしよう。そして万が一にでもお前達の誰かが死ぬような事になれば俺達の心に一体どれ程の傷を作ると思うんだ？頼むから危ない事はしないで欲しい。お前達は皆仲間達が創造した宝物なんだから。」

「違ういな、グラノーラさん。お前達に厳命する

今後自らの命を軽んじるような行為は厳禁とする!!

以上だ！細かい事は追々決めていこう。」

そういつてモモンガは一人どこかへ転移した

「……………え？」

一人取り残されたグラノーラ。目の前には自らを宝物と言われた事に感激し咽び泣く僕達。

そしてその中から一際大きな体の持ち主が立ち上がり近付いて来る。

コバルトブルーの巨軀が心無しか嬉々（鬼気）とした足取りで近付いて来る。

全てを凍てつかせる白い吐息を吐きながら。

何も無い虚空に手を差し入れる、抜くと森羅万象ごとごとく切り裂いてしまいそうな鋭く恐ろしくも美しい太刀がその姿を現す。

そう。

グラノーラが先程、勢いに任せつい言ってしまった稽古をするべく蟲の王が近付いて来る……

剣と魔法の〇グレス!!

幾度も幾度も繰り出される斬撃を槍で捌き、いなす。

一度でもミスをすればどうなるか、分からない程グラノーラも馬鹿ではない。

ゲームでなら何度も受けた。しかし、リアルでは当然だが、斬られた事など一度たりともない。

それでも痛い事くらいは分かる、とてつもなく痛いのだろう。それくらいなら分かる。

しかし、分からない事が一つある。

なぜ、自分は自らの師範役である第五階層守護者コキユートスと戦わなければならないのかということ。

時をさかのぼる事30分前。

無情にもモモンガにおいてけぼりをくらい、呆然とするグラノーラの前に完全に武人スイツチの入ったコキユートスが仁王立ちしていた。

「サア、グラノーラ様。早速デスガ稽古ヲ始メタク思イマス。」

只でさえ大きな体がより大きく見えるのは気のせいだろうか。期待に胸膨らませ過ぎて本当に体が大きくなったということなのだろうか。尋常ではない威圧感に、小心者のグラノーラが精神が目一杯の大音量でサイレンを鳴らす、あえて無視をする。ここで引けば先ほどの苦勞が水泡に帰すからだ。

「あ、ああ。頼むとしようか。えーと、コキユートス先生と呼ばいいのかな？」

「ソレハ、アマリニモ恐レ多イ事ニゴサイマス！」

「コキユートスト、オ呼び下サイ。」

「そうか。じゃあそうさせてもらおうかな。」

「じゃあコキユートス、まずは何から始めるんだ？」

素振りか？精神統一か？」

「イエ、先ズハ御身ノ御力ヲ測リタク思イマス。」

「待ちなさいコキュートス！グラノーラ様を試すというの？あなたは一体何様になったつもりなの！いくらなんでもそれは不敬よ！己が分をわきまえなさい！」

グラノーラの力を測るといふ言葉にアルベドが横合いからコキュートスを叱責する。

「まあ待てアルベド。コキュートスにも何か考えがあつての発言だろう。そうだよなコキュートス？聞かせてくれお前の考えを」

グラノーラはアルベドを言葉で制しつつコキュートスに真意を問う。

「御身ノ御力ヲ知り、御身ニ対シテドウイツタ稽古ヲシテイタダクカラ決メタク存ジマス。不敬ハ百モ承知シテオリマスガ、グラノーラ様ドウカオ許シヲ。」

「なるほど、だが実際に力を測るといってもどうするのだ？」

グラノーラの問いにコキュートスはプシューと白い息を吐き出し答える

「……グラノーラ様トノ手合ワセニテ測リタク存ジマス。」

そう答えた瞬間、グラノーラとコキュートスの間に守護者達とセバスが割って入る。

「コキュートス、貴方……その意味分かってるの？」

「無論ダ……」

「御身に刃を向けると？それがどれ程の大罪か理解しているのかしら？」

「無論シテイルトモ……」

アルベドの詰問にも何処吹く風といった様子で答えるコキユートスに対して他の守護者達も非難の目を向ける。

そんな中でもコキユートスは守護者達ではなくグラノーラをじつと見つめ微動だにしない。

まるで二人の間には何も無いかのよう。

了解するか否かをグラノーラに問い掛けるように。

ここで却下だと口にすれば済むのだろう。

しかし、済ませてはならない気もした。この異世界で自分がどの程度戦えるのか知る必要があると思ったからであり、何より配下との稽古で怪我が怖いから嫌だとは何とも

格好悪い話じゃあないかと。

「……良いだろう。コキュートス、お前との手合わせはこの俺グラノーラが許可する！
外野は下がれ。」

「そんな！危険です！御身に何かあれば我々はモモンガ様に会わせる顔がありません！
お考え直し下さい！」

懇願するアルベドに他の守護者達も続く

「アルベドの言うとおりでございます！……一考を！もつと安全に確実に御身の御力を測
る方法があるはずです!!何卒ツ!!」

「そうでありんす！危ないでありんす！」

「アタシもシャルティアと同意見です。ねっマーレ？」

「あつあの、そうです!!」

「(安全で確実な方法……か。確かになあ、でもいつ何処から敵が来て戦闘が始まるかもしれないんだ。」

「考えてる余裕はない。スキルは問題なく使えたから、魔法もOKってことかな？そんなると、他に知っておくべき事は俺の近接戦闘能力か。やっぱり戦闘訓練は必須だな！」

アルベド、デミウルゴス、それに他の守護者達もだ。

「下がれ。……命令だ。」

「ですがっ！」

それでも尚、食い下がってくるアルベド達に正直グラノーラは困っていた。

「……なら、万が一にも俺の命もしくはコキユートスの命が危険だと判断した場合にのみ止める事を許可する。それならどうだ？言っておくが、俺はこれ以上譲歩しない。何、難しい事じゃない。お前達に審判をしるというだけの話だ。」

「ですが……」

「はあ、そうか……お前達はこの俺がコキユートスに遅れをとると?」

「いえっ! その様なことは決して!」

「では、下がれ……これ以上俺を不快にさせるつもりか？」

「……かしこまりました

……下がりましたようアルベド、

ですがグラノーラ様、もしも万が一、億が一にも、御身もしくはコキュートスの命の危険を察知した場合は我々守護者一同が全力を持って止めさせていただきます。何卒ご容赦を……」

「分かった。では下がれ。」

恭《うやうや》しく頭を下げ、後ろに下がるデミウルゴスが下がり様に、未だに何とか粘ろうとするアルベドに何やら耳打ちをする。

「コキュートス……やっておしまいっ!!」

態度が一気に180。一変するアルベド。

ちなみにデミウルゴスが耳打ちした内容は

「疲れ果てて、心身ともにボロボロになってしまわれたグラノーラ様の介抱は一体、誰がするんでしょうね……」

「フフツ……わかりますね？」

「というもの。」

「グラノーラ様、参リマス……」

コキュートスが勢いよくグラノーラに斬りかかる。

グラノーラもコキュートスの斬撃をグングニルで防ぎ、距離をとる。

コキュートスの武装は

大太刀・斬神刀皇

太刀・氷王ノ牙

の2本である。

グラノーラの介抱という言葉に目がくらみ、コキュートスのやる気スイッチをONにしてしまったアルベドだが、

コキュートスには存分に頑張つて貰わねばならないので特に後悔はしていない。
むしろもつとやれと思つている。

そんなこんなでかれこれ20分弱、つまり現在だ。

武器を用いた戦闘において守護者最強を誇るコキュートスの斬撃をグラノーラがここまで一度も受けずに済んでいる事は別に奇跡というわけではない。

グラノーラの持つ槍、神槍・グングニルは火力面において別段優れている訳ではない、狙った対象を絶対に外さない。遠距離の敵に投げようが、近距離の敵を突こうが、対象の数も関係なく、狙った獲物のみを撃ち抜く槍

であり、敵の攻撃を自動迎撃する能力も備えているため基本的にグングニルさえあれば負ける事はないのだ。

まあ弱点が無いわけでは無いがそれは使っているグラノーラ本人しか知らない事だ。

グラノーラは本来、自分のスキルを使えない場合を想定してこの稽古を提案した。

つまり、自分の技量のみで捌かなくてはならないコキュートスの斬撃をグングニルの性能のみで捌いている本末転倒な状態だ。こんなものが稽古になるわけがない。

しかしグラノーラにそんな事を気にしている余裕は微塵もない。

なぜならグラノーラはグングニルの能力を使っているつもりは一切ないためだ。自分が必死にコキュートスの斬撃を防いでいると勘違いしているだけなのだ。

ギリギリの攻防をしていると考えているグラノーラと

まるで計算され尽くしているような防御に驚嘆するコキュートスの茶番はグラノーラが感じ取った僅かな違和感により解消される。

ガキーン！と金属音を響かせつつグラノーラはグングニルを横に薙ぎ払いコキュートスと距離をとり

「待った!!ストップだコキュートス」

距離を詰めようと突進気味に走ってくるコキュートスは急ブレーキをかけ、地面を抉

りながらグラノーラの一メートル程の所で止まる。

「イ、如何ナサイマシタカ？グラノーラ様。」

少し困惑しながら質問をなげかけてくるコキユートスにグラノーラが告げる。

「お前……退屈してるだろ？」

「ツ!!!ソノ様ナ事ハゴザイマセン。」

「本心を言え。命令だ」

「ハッ、ソノ……僅カニ……」

この発言にぶちギレたのはグラノーラではなくアルベドでもなくシャルティアだった。

「そしてお前に褒美だ。

稽古に付き合つて貰つたからな。

褒美をやらないとな？」

しゅんとするコキュートスにグラノーラは突然の褒美を口にする。

「褒美ナドト！ 恐レオオイ事ニゴザイマス!!」

「なに、大したことじゃない。

……一撃だ。一撃だけが全力で撃つてこい。

お前の全てを一撃に込め俺にぶつける事を許可してやると言うだけの話だ。」

「ソ、ソレハ……」

ヨロシイノデショウカ？」

つ。
グラノーラの物騒な褒美に乱心気味だったアルベドを含む守護者達が二人の間に立つ。

「ん？なんの真似だお前ら？」

「恐れながらグラノーラ様。これ以上は危険と判断いたしました。」

若干不愉快気味に質問をなげかけてくるグラノーラにアルベドが深々と頭を下げつつ答える。

「危険？コキュートスの全力の一撃が危険？」

何をいつているんだ？

あ！言うのを忘れてたな。

言っておくがコキュートス、お前の全力の一撃を俺は防ぐからな？絶対に。
だから安心して撃ってこい。

さあお前からこれで満足か？下がれ。」

どこか納得していない守護者達を何とか説得し

再びグラノーラとコキユートスが向かい合う。

距離にして5メートルといったところだ。

「デハ、参リマス、デスガ本当ニヨロシイノデスカ？」

「構わない。来い!!」

その言葉を聞きコキユートスは自らをいくつもスキルを重ね掛けし、強化していく。

「才待タセシマシタ。

参リマス!!!」

コキユートスは5メートルの距離を一瞬で詰め、自身が誇る最強の一撃を放つ。

「スキル発動！アチャラナータ！俱利伽羅劍!!」

森羅万象を切り裂く最強の一撃は巨大な斬撃となりグラノーラに迫る。

が、グラノーラは右手をかざし一つのスキルを発動する。

「スキル発動、神判【ジャツジメント】」

スキル・ジャツジメントの効果は至ってシンプル。

全ての能力、アイテムやスキル、物理、魔法を無効化するだけだ。

但し連射はでない上に、防げる攻撃は一撃のみ。

しかも100時間に一度しか使えないというデメリットもある。

パアンという破裂音と共にコキュートスの渾身の一撃が塵と化した。

「ナ、ナント……」

「オ見事ニゴザイマス。グラノーラ様。」

「フフツそうだろう？ 本当は超位魔法や世界アイテム対策に使うスキルなんだかな。
(あー怖かったあ……)」

「お見事です！ グラノーラ様！ 流石は至高の御方！」

守護者達からの褒め言葉の雨あられに照れ臭くも誇らしい気持ちになったグラノーラは頭をかきつつ告げる。

「よし！ みんな今日はご苦労だった。各々持ち場に戻って結構。

ああ、セバスとユリとソリユシヤンは褒美をなるべく早く報告するように！」

解散!!」

こうしてグラノーラの稽古は幕を閉じるが

後日コキュートスから継続は力なりと詰め寄られ、この稽古を三日に一度のペースで行う事になったのは別のお話。

月並み位がちょうど良い

ここはナザリック地下大墳墓第六階層のジャングル

つい10分程前まで、グラノーラとコキュートスが稽古をしていた場所から少し離れた場所

ジャングルの中にあるロツジの前の広場だ。

そこには巨大な白い巨大な狼にもたれ掛かっているグラノーラとその両サイドに寄り添うように褐色の双子、アウラとマーレがいた。

「いかがですか、グラノーラ様？」

「ん？ああ、気持ち良いよ。

アウラも上手いがマーレも上手いもんじゃないか。」

「あ、ありがとうございます！えへへ」

「むう、マールえつたら」

そう言うのと、アウラはグラノーラの顔に自らの顔を近づけ、手にした棒を優しく慎重に動かしていく。

棒を動かしつつ、グラノーラの様子を観察し、的確に気持ちいいであろう所を責めていく。

マールもそれを真似る横にグラノーラの顔に自らの顔を近づけ、ぎこちないながらも優しく棒を動かしていく。

「お、お姉ちゃん、僕つ、大きいのが来そう！

奥に入れてるのがつ……」

「んっ！あたしも……来そう！

奥に入ってるのがつ……！おっきい……のがつ！」

「とれたー！」

ててててつてれー

.....

耳かきである。

そう！グラノーラはコキユートスとの稽古の後に、癒しの森こと、ここに来ていたのだ。決して卑しの森ではない。

そして癒しと言えば耳かき！とかつてアウラ達を創造したぶくぶく茶釜が言っていたと、アウラが言い出しマーレとともにグラノーラの耳かきをすることにしたのだ。

そもそも墮天使に耳垢なんてあるのか？とグラノーラも思ったが
以外とあった。恐らく人並み程度にあった。

耳かきはアウラが魔獣用の耳かきを持ってきてくれた。

因みに三人が寄りかかっている大きな狼はアウラの使役する魔獣のフェンリルであ

る。

北歐神話の主神オーディンを飲み込んだ巨大な狼の怪物のことであるが、当然このフェンリルはそんな事をするはずもなく、三人の背もたれとして、その極上の毛並みを活用していた。

「いやーほんと、こんな可愛い少年少女に耳かきをしてもらえるなんて、なんて素晴らしいんだ!!アレがなければホントに天国みたいや感じなんだけどなあ……」

うつすらと目を開けて少し離れた樹を見ると、その陰に真顔でこつちを見ているアルベドが立っているのが怖くて仕方がないのだ。

寝たら最後、何をされるか分かったもんじやない為に下手に寝ることもできない。

しかし、アウラとマーレの耳かきの心地よさに強烈な眠気を感じているために思考が停止しかけるが、その度に樹の陰にいるアルベドをチラ見して意識を保つループをすでに五回程繰り返し返している。

一方その頃、モモンガは第九階層の一室にて、遠隔視の鏡〔ミラー・オブ・リモート・ビューイング〕を使い、周囲を見ている最中であつた。

「ん？祭りか？」

小さな村らしきものがそこには写っていた。